# 「日本人のフランス語との最初の出会いー長崎通詞本木正栄らの忘れられた偉業ー」

市川慎一

1807 年(文化四年)、長崎のオランダ商館館長ヘンドリック・ズーフ(1777-1835)は長崎奉行から未知の外国語で認められた書簡を手渡され、そのオランダ語訳を求められた。その書簡とはロシア人がフランス語で書いた一種の脅迫状で、日本人がはじめて目にする、新しい外国語だった。こうして、十八世紀末から、日本近海に出没する異国船への対応にも迫られた幕府は、フランス語や英語の習得をオランダ通詞に急遽、命じざるをえなくなったのである。

幸いなことに、オランダ商館館長ズーフにフランス語の知識があり、彼の所有したピーテル・マリーン『フランス語およびオランダ語の新方法』(1775 年版)を手がかりにして、彼は長崎の本木正栄[庄左衛門]ら六人のオランダ語通詞にその中身を口述させた。

その結果、長崎市立博物館に草稿のまま残されたのが、「払郎察辞範」と「和仏蘭対訳語林」である。

ただ、私は、岡田和子氏のようにオランダ語が読めませんので、今日の発表は本木らの偉業の一部(フランス語と日本語)を具体的に紹介しながら、彼らの血のにじむような努力が未完成に終わった理由について、私の推論を述べてみたい。